

絶対平和主義（1）

—— その歴史的展開 ——

Overview

- 平和主義——概念の整理
- キリスト教の場合
- イスラームの場合
- 仏教の場合

平和主義——概念の整理

- 絶対平和主義：「無条件」平和主義
 - 一切の問題解決を「平和的手段」（非暴力）によって行う。
 - 例：レフ・トルストイ（宗教的信念に基づく）
- 平和優先主義：「条件付」平和主義
 - 自由主義、功利主義（最大多数の最大幸福）などを思想的ルーツとする。
 - 例：パートランド・ラッセル（ナチスとの戦いを正当化）

キリスト教の場合

最初期の教会

- 迫害時代においては、イエスの言葉に基づいた絶対平和主義（暴力の否定）が基本であった。
- ミラノ勅令（313年）以前にはキリスト者が戦争に行ったり、職業軍人になることはイエスの教えに背くこととして、また、**偶像崇拜**（＝皇帝崇拜）に近づくこととして、是認されることはなかった。

根拠となったイエスの言葉

- 「あなたがたも聞いておおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」（「マタイによる福音書」5:38-39）
- 「あなたがたも聞いておおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」（「マタイによる福音書」5:43-45）

(参考) アガペーの中の暴力性

- 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」（「マタイによる福音書」10:34-37）

平和主義から正戦論へ

- 「コンスタンティヌス体制」（313年、ミラノ勅令）以降、絶対平和主義の考え方は、徐々に主流から傍流へと移行していく。
- アウグスティヌスが正戦論の基礎を築く。
- 絶対平和主義は、ワルド派、カタリ派、メノナイト、クェーカーなどの少数派を通じて受け継がれていく。

絶対平和主義の影響を受けた人物

- マハトマ・ガンジー（1869-1948）：ヒンドゥー教徒。トルストイや新約聖書から影響を受ける。
- マルチン・ルーサー・キング（1929-1968）：ガンジーから影響を受ける。
- 内村鑑三（1861-1930）：終末論的平和と非戦論との結合。
- 安部磯雄（1865-1949）：新島襄より洗礼を受ける。同志社から早稲田へ。非戦論と小国主義。
- 柏木義円（1860-1938）：『上毛教界月報』を中心に非戦論を主張。

信仰の要請として絶対平和主義を理解する神学者

- J.H. ヨーダー、S. ハワーワス
- プラグマティックな理由から非暴力を選択することを拒否する。その効果の如何に関わらず、キリストに従うことを求める。暴力を拒否することによって、たとえ多くの死者が出たとしても、キリスト者はそれに荷担すべきではないと考える。

正戦論からの絶対平和主義への批判

- ラインホルド・ニーバー（*Christianity and Power Politics*, 1940）
- 1. プラグマティックな絶対平和主義者は人間の罪の深さを認識していない。
- 2. 新約聖書における無抵抗の戒め（マタイ5:39）は非暴力的に抵抗することとは異なる。
- 3. 抵抗しなくても専制政治は自ら滅ぶと考えることは歴史的事実に反する。

イスラームの場合

共同体の防衛

- イスラームの現実主義と絶対平和主義とは相容れない。
- ムハンマドは、マッカ（メッカ）の多神教徒軍と戦って勝利した最初の大規模な戦いであるバドルの戦い（624年）以降、自ら20回あまりの戦いに参戦している。つまり、イスラームの場合は、その最初期から共同体の形成と数々の戦いとは密接な関係にあった。

キリスト教が、ローマ帝国という強大な国家権力とその迫害のもとで、絶対平和主義の立場を取っていたのに対し、イスラームの場合、最初から、マディーナ（メディナ）を中心としたイスラーム国家の形成と信仰共同体の拡大とが不可分の関係にあり、そもそも国家と宗教の二元論的な関係が存在していない。そのような意味でも、キリスト教の最初期に見られたような絶対平和主義はイスラームには存在しないと言えるが、そのことによってイスラームを好戦的な宗教と評価すべきではない。

仏教の場合

- 釈迦の言葉（パーリ語聖典より）
「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。が身をひきくられて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」（『ダンマパダ』129）
「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。が身をひきくられて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」（『ダンマパダ』130）
（中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』岩波書店、1978年）
- 仏教は「不殺生」（アヒンサー）、「非暴力」の伝統を持っているが、仏教は戦争と無縁であったわけではない。

不殺生

【参考文献】

- ジョン・ハワード・ヨードー 『愛する人が襲われたら——非暴力平和主義の回答』 新教出版社、1998年。
- 松元雅和 『平和主義とは何か——政治哲学で考える戦争と平和』 中央公論新社、2013年（中公新書）。